

出羽三山 月山～葉山

「白銀の月山のみね 朝夕に仰ぎのぞめば……」ではじまるのが、わが寒河江市高松中学校の校歌だった。朝日連峰を源とするが途中で流向を東に変える寒河江川は、中学校から見るとあたかも月山から直に発するよう見える。

しかしこの「白きたおやかな峰」は、周辺が晴れていてもすこぶる機嫌が悪く、必ずしも「朝夕に仰ぎのぞめ」るわけではない。いっぽう吹雪におおわれてくるさまをみさだめ、いま下校すれば吹雪が自宅に至る前に着けるとわかるくらい身近なのが葉山だった。かくのごとく育ったわれらは別々の山ととらえていて、それをつなごうとは思ひ浮かばない。そこにこの計画の妙味がある。(佐藤耕記)

月山、葉山のいずれも、思い入れのある特別な所だ。それを繋げてみようという計画である。スキーの使用も考えたが、確実性を優先して歩きを選んだ。沢を横断して、馴染みのない山々を越え、本当に月山と葉山は繋がるのであろうか。

また、当初の日程は4月28日から4日間としていたが29日～30日の天気が荒天予報のため、山行の成功率を上げるためそれをやり過ぎてからのスタートとした。それもメンバーが皆、GWはこの山行一本に絞っていたからこそ可能であった。5月1日は早めに現地入りし、トラディショナルな登山スタイルにて明日からの山行に備える。(棚橋記)

5月2日(木)：曇り後晴れ

朝起きると下界の天気は予報より早く回復していたが、山はまだ風が強いようだ。今日中に清川行人小屋まで行ければ、その後の予定が掴めると思うので、そこまでは時間を余計に使ってでも何とかしたいところ。月山の気象条件が厳しめなことは承知しているので余裕を持って予定通りに、前泊した宿の車で月山リフトが動き出す前には姥沢に送ってもらった。

山は雲で覆われていて、リフトも風のためにいつ運行を見合わせるかわからないことを繰り返しアナウンスしている。しかし天気は回復傾向にはあるので兎に角、動いているうちにリフトに乗り込んだ。上部も風は吹いているものの行動不能というほどではないので、休憩舎で準備を整えた後、まずは清川行人小屋を目指して登り始める。こんな天気だが歩きの単独行者とスキーの2人組が先行していた。我々はそのトレースを追う事もなく、いつものルートを辿った。

標高を上げるとともに視界は悪く風もかなり強まったが、スキー板が無いのが幸いして飛ばされそうになることもなく、頂上小屋へと着いた。そして早々に清川行人小屋に向

【日程】

2019年5月2日(木)～
4日(土)

【メンバー】

棚橋(L)、佐藤、
他1名(佐貫)

【地形図】

月山、葉山、本道寺、海味

【記】棚橋、佐藤



強風の月山山頂付近

けて歩き出す。

稜線の南側に入ると風はまだ強いが、視界は劇的に良くなり、日差しが眩しい。大斜面を下って行くと小屋が見える。なるべく登り返しがないように進むと見覚えのある小屋に着いた。スキーでは何度も訪れたが、歩きでは初めてである。行動食を食べたり、葉山を眺めたり、水場を確認していたら 12 時半ではあったが、この小屋が快適なのはよく知っているので誘惑に逆らえず、やはり「ここに泊まろう！」ということになった。

まずは宴会、そして夕食で明日からの英気を養う。16 時半過ぎ、耕至さんが裏窓越しにこちらに向かっているパーティを見つけた。確かに 4 人、しかも歩きのようだ。よく見るとスキーを担いでいる。コンディションが悪いらしく少々時間を掛けて下りてこられた方々を見てビックリ。何と高桑さん御一行であった。強風のため雪が硬く、しかもアイゼンも無かったため苦労されたとのこと。お疲れ様でした。一緒に宴会をさせて頂きたいのはやまやまであったが、我々の今日の分の食料とお酒は無くなってしまったので、大変残念であったが早々の就寝となった。

5月3日(金)：晴れ

3 時起床。同宿者の安眠を極力妨害しないよう、なるべく静かに朝食をとり出発準備を整える。4 時 15 分には小屋の外に出たが、もうヘッ電は不要だった。今日もやや強く風が吹いているが、視界は良好で気持ちが良い。

まずはサカサ沢の渡渉が待っている。登山道はトラバース気味に付けられているので、今回はあてにせずに尾根を辿る。Co1177m の所で尾根が分岐しているが、雪庇が落ちてやや大きなギャップとなっている。しかし廻り込んで下りることができた。沢までもう一息という所まで下りると、やけに沢音が大きくなってきたので不安がよぎる。しかし想像以上に雪が多く、もう少し近づいてみないと詳しい様子は分からない。最後の 150m は結構な斜度となっていたので、なるべく弱点を選んで下りた。

サカサ沢は 2m 程の積雪に、しっかり口を開いていた。幅は 3m 程であったが、まだ 6 時を過ぎたばかりだというのに既に雪代も出始めている感じだ。横断予定箇所から上流部にかけては対岸が崖のように迫っていて上がれないし、へつりも難しい。少し下流だと対岸が広がるのだが、両岸から支流が 1 本ずつ入った下部になってしまうために水量が多く渡渉が困難だ。残雪の微妙な多さが難しくしている。予定していた、弱点を突いた好ルートからは登れなくなるが、ここで敗退はしたくないので渡れる箇所を求めて少し遡ることにする。少し先で微妙に小さなスノーブリッジが 1 つだけ架かっていた。対岸もやや急であるが雪が付いていて、アイゼンがあれば上がれそうだ。スノーブリッジが崩れた時の対処方法を考えた後、慎重に歩を進め、3 人とも何とか無事に渡ることができた。

やや急な雪壁を 100m ほど登ると尾根状に出た。ここより手前のポコを経由して 350m ほど登ると地蔵森山へと着く。予定より幾分遠回りとなったが、十文字山へと繋がる尾根に出た。地蔵森山を踏むのは、予定では藪やアクシデント等で本道寺にエスケープせざるを得ない場合のはずであった。しかしまだ 9 時前であり、それほど時間のロスもしていな



サカサ沢の横断

いので、ここからエスケープすることは考えず、前進することとした。また三角点を探してみると運よく見つけることができ、気持ち良く先に進む。

稜線上を進んでいくと中腹に付けられている林道が近づいてくるので、そちらに乗り換えて少し進む。稜線とまた離れる辺りで稜線に戻ると程なく十文字山に着いた。そして眼下の沢の向こう側には、今日の幕営を考えていた葦草森山が見える。沢形に向け最低鞍部を目指すと山頂まで200m弱の登山道がある。その最低鞍部は銅山川と間沢川の分水嶺となっている。沢形は十分広く、林道も付けられている。登山道は登り返さない方がむしろ幕営地を見つけ易いので、この沢形を間沢川方面に進むことにする。少し進むと思惑通り、平坦且つ水も取れる絶好の幕営適地が得られた。二日連続で水作りをしなくても良いなんて積雪期では記憶が無い。朝の強風もいつの間にか収まり、日差しも暑いくらいで気持ちが良い。正に桃源郷のような幕営場だ。ここでゆったりと、いろいろあった今日一日を振り返った。(棚橋記)



2 泊目の幕場

5月4日(土) : 快晴

3日目。葦草森山(いくさもりやま)の南東、銅山川の支流と間沢川ふたつの分水嶺となっている湿原の泊地を後に、931m付近から再び郡界尾根にのる。ちなみに「郡界」とは行政区としては西村山郡と最上郡の境。2004年の夏に銅山川の支沢を遡下し月山の念仏ヶ原にたどり着いたときは最上の中だけだったから、「郡界」にいるだけで感慨がある。

昨日のように寒河江川流域を見下ろして位置を測ることはできないが、月山より視界は離れ葉山に抱かれるように寄ってきた。たおやかに雪ののった稜線は、三合山の手前、熊野川右岸尾根が出合う手前辺りから藪が邪魔しはじめる。雪の残る稜線の北面を探したが、尾根も狭く傾斜も増して岩稜が立ちはだかる箇所もあり重い荷が足を引っ張る。

藪っばいながらも踏み痕らしきものやナタ目に気づくこともあり、「やっぱり人の通う尾根だったんだ」と、ルート発案者の佐貫さんは、いにしえの人々と感覚を同じくできたことを喜んでいる。古来葉山は出羽三山のひとつに数えられていたが、中世末期から近世初期にそこから離れたため、修験の道ではなく狩猟等の道だろう。おりあしく登山靴のソールがはがれてきて、スリングやスパッツのワイヤーで固定しヒヤヒヤ歩みの情けないのが、マタギとは大違いのわが身である。



岩尾根の通過

三合山考

直下の急登を南側から攀じると、三合山の頂上は平らで広く360度の大展望。朝日、蔵王までの奥羽はもちろん、鳥海や神室と山形の山すべてが雲ひとつない天蓋の下に揃い踏み。この展望こそが「その理由かもしれない」と、頂に立ち初めて納得できた。

「本山慈恩寺」のボランティアガイドの記述に以下のようにある。

「葉山に初めて修験者が入った時期は平安時代の中頃と考えられています。鎌倉時代に入った文治元年（西暦1185年）に慈恩寺に真言宗と修験道が伝えられた後の葉山は慈恩寺の真言系の修験者と既に入っていた天台系や真言系の修験者の行場となりました。

ところが室町時代末期の天正年間（西暦1573～1591年）に葉山の修験者の間に騒動が起こり慈恩寺の修験者は葉山と袂を分ち別の峯（三合山）に修験道の場を移しました」

「葉山と袂を分ち別の峯（三合山）」に場を移したというのが、この葉山の西隣の三合山だとすれば、なぜこんな小さな山なのか疑問だった。それがこの展望のためだとすれば合点もいくというものである。

ただそれが正しいかといえば、以下は「60 横串山行」でお世話になっている仙台YMCA山岳会前会長の深野稔生さんの「(続)東北の山遊び」のサイトの記述である。

「1573～1591年の間に、何らかの理由で慈恩寺と葉山の峯中の関係が切れてしまい、慈恩寺だけの修行の場：山業（さんごう）を設けて、慈恩寺独自の修験が行われるようになる」。

寒河江市の慈恩寺紹介にも以下とある。

「1586年（天正14年）から41年間の峯中中断を経て、1627年（寛永4年）からは慈恩寺だけで峯中を行うようになった。慈恩寺から北の山中に、一の宿（新山堂）、二の宿（高森・池）、三の宿（山業・愛染ヶ嶽）と修行場を定め、4月晦日から6月朔日の1ヵ月間峯中を行った。1872年（明治5年）の修験宗廃止まで定期的に峯中が行われた」。

つまり慈恩寺修験の場は、葉山の西の「三合山」ではなく、「三の宿（山業さんごう・愛染ヶ嶽）」ではないのか。とはいえ、今回立った「三合山」が慈恩寺修験の場でもいいほど、険しく展望のきく山であることには相違ない。

さてその三合山山頂から十部一峠までは山スキーに恰好な広いブナの斜面。十部一峠付近は舗装路面も出ていたが、2004年には下れた永松鉦山跡への道は「土砂崩れのため通行止め」という車止めが出ていた。

黒森山への稜線を葉山まで辿る計画だったが靴の故障もあり、林道上を通ったほうが早いと1089から稜線にあがる。葉山神社の屋根の形が見えるほどなのに、月山は幾重もの前衛の向こうに鎮座し、もはや遠い。積雪期に来



十部一峠

たのは初めてだった葉山神社からは、三合山に劣らぬ山形の山総出演だけではなく、馬蹄形の爆裂火口の先に最上川沿いの町や村が見える。そこへは山スキーではクラシックルートになったかと思っていたが、先の仙台 YMCA 山岳会によればまだ十分楽しめるのだそうだ。スキーでの再訪を誓う。

計画では3日目に葉山付近に泊まる予定だったが、14時台のため下ってしまうことにした。山頂を越すと、寒河江川が村山盆地に出る中学校の辺りから寒河江や谷地の周辺が、たなごころにあるように鮮明に見える。普段は「あっちからこっち」を見上げているのに。小僧森から畑への下りのブナ森は、畑の隣の田代小学校に勤めていた母と、地域の行事で葉山登山をした子どもの頃を思い出させた。歩いていくにつれあっちこっちと思い出させる、「ふるさとの山に向かひて言うことなし ふるさとの山はありがたきかな」である。(佐藤耕記)



葉山に着いた！

【行程】

- 5/2 姥沢(8:20)～月山リフトトップ(8:35/9:00)～頂上小屋(11:20)～清川行人小屋C1(12:27)
- 5/3 C1(4:33)～サカサ沢渡渉点(6:08/34)～地藏森山(8:46/9:00)～予定ルートとの合流点(10:00)～大文字山(13:06/10)～銅山川支流と間沢川の分水嶺付近C2(14:33)
- 5/4 C2(4:27)～三合山(9:29)～十部一峠(9:56/10:03)～稜線 Co1089(12:25)～葉山神社(14:00/22)～葉山山頂(14:40/43)～畑集落(15:09)



出羽三山/月山～葉山
 【日時】2019年5月2日(木)～4日(土)
 【メンバー】棚橋(L)、佐藤耕、佐貫
 【作図】棚橋